

優秀賞の「蝶を殺せないダメな僕」は、才気を感じさせる作品でした。「ぼくは障害を持っていた」という書き出しから、「その障害が分かったのは小学校低学年のある授業だった」という説明、そしてその授業が「いのちをつんでみよう」ということで、読者を「えっ?」「あれっ?」と思わせつつ作品世界に引きこんでいきます。つまり、作品としての戦略がきちんと立てられているのです。そして、その戦略が最後まで貫かれているのは、見事だと思いました。ただ、死神たちの世界と人間の世界との関係性(どのように行き来しているのか)が見えにくいのと、「センパイ」の人物像がもう一つ描き切れてないと思いました。

奨励賞の「12」は、ある意味対照的な作品でしたが、こちらも作品としての戦略性は確かなものがありました。教室の机にうっすらと書かれた「元気ですか?」という6文字から始まる、なかなかビミョーなドラマ。そこに、二人の関係性を重ねていくという狙いには、作者の文学的センスを感じました。しかし、こういうタイプの作品は、ストーリーというよりも、場面場面のリアリティ、会話や心理描写で読ませていくだけに、とても難しいのです。それでもここまで仕上げたのは立派だと思いましたが、「3ヶ月」の空白感が描き切れておらず、ラストの収まりが今ひとつの感があり、残念でした。

佳作の「Butterfly Effect」も、おもしろく読みました。これもなかなか難しい狙いの作品で、かなりの文章力が求められますが(つまり、現実と幻想との境目のところを、読者にイメージさせなければならぬわけですから)、特に前半部分はそれをクリアーしていると思いました。ただ、亜美が登場してからは、優奈が(今まで北海道で暮していたのに)夏休みが早く終わることに気づいてなかったという不自然さも含めて、やや無理があるように思いました。それでも、別れの悲しみや友情を、Butterfly Effect というキーワードで描こうとしたのは、ナイスチャレンジだったと思います。

もう一つの佳作作品「想い残し(ゼロ)本舗」も、なかなか力のある書き手だと思いました。ただ、死んだ後で何日間か“現世”での時間を与えられるというのは割合見られる設定で、そういうパターンを使ってもいいのですが、この作品ならではの独自性がほしいところでした。それと、「     」の会話文(台詞)と地の文とが改行されずにつながって書かれている文章は、やはり読みにくいです。なにより作者自身、書き直そうとする時に、場面がパッと目に飛び込んでこないと思うのです。このあたりは、自分の好きな本などの文章を研究してください。

論説文は、論者自身の体験が説得力になっていきましたが、「友情」を考えさせる文学作品や映像作品などについて触れられたものがなかったことが、残念でした。